

## 道徳の現場としての怒り

西 村 誠

はじめに

滅多にないことだが、私は、つい怒りに身を任せるとき、なすべきではなかったことをしてしまったと後悔し、自分の短気さに恐れを感じる。また、頻繁ではないが、湧き上がろうとする怒りの気配を自分のうちに感じてそれを抑えたとき、なすべきことをしなかったと、自分の臆病さに疾しさを感じる。

怒りをめぐる私のこうした両面的な感覚に対応するように、一方で、セネカ（怒りについて）は、怒り（*ira*）を自然に反したものの、つまりは悪と見做し、親密なものに対する不正への復讐においても、公共的なものに対する不正への裁きにおいて、怒りを離れ、ただそれらが為すべき仕事（義務）だからと

いう動機だけで復讐と裁きに臨むべきだとし、他方で、イエーリング（「権利のための闘争」）は、他者の権利が蹂躪されるのを目撃して激怒し、倫理的怒りを感じる（*Entsünderung und stillen Zorn empfinden*）人物を、強い義務感の持ち主として絶賛する。このように、怒りに対する道徳的評価は両極端に分かれる。

このことと関連して、怒りにはもう一つ厄介なことがある。例えば、私は、怒りを離れて過ごせる時間を有難いと思うが、その一方で、自分が何か空想の中で生きているのではないかと不安になる。また、そうした表層的な日常に影のように付きまとうていた現実が、自他の怒りの発作をきっかけにはつきりと姿を現わすとき、その野蛮な姿に恐れおののく。

理性をそれだけで意志的行為の十分な動機とする理性主義的

道徳と、選択意志による意識的考量からは独立した非合理的な衝動が行為に導くとする決断主義的道徳との対立的並存は、怒りのこうした厄介さと響きあっている。

アドルノは、ここに素描した怒りがそうであるように、道徳に関して理論的にきれいに位置づけられないものと、それでもそうした厄介なものを見つめて何とか理解にもたらそうとする意識との「矛盾」を「今日における道徳の現場 Schaulplatz」(GS VI, S. 282)<sup>(1)</sup>と呼んでいる。

以下では、そうした「道徳の現場」の一つとしての怒りについて、まず、怒りを含む情動と行為との関係について考察する際の準拠枠として、アドルノの衝動論と怒りという情動の道徳的な意味合いに関するアドルノの記述とをごく簡単に取り上げ、その上で、アドルノからかなりの集中砲火を浴びている直接的行動について、その道徳的に有意味な形の可能性を探るため、現代韓国の人権運動家であり「怒りの人」でもあるソ・ジュンシク(徐俊植)の思索と行動を検討したい。

### 一 意志行為と衝動、そして怒り

——アドルノに即して——

アドルノによれば、意志行為は、理性主義的道徳の立場からの見方とも決断主義的道徳の立場からの見方とも異なり、理性的・意識的な契機と衝動的・非合理的な契機との両者から成り

立っており、決してそれらの一方に解消されえない。そうした意志行為についてのアドルノの多様で入り組んだ記述を要約すると、理性は、純粹であれそうでない場合であれ、それが理性的意志となつて行為を規定する際には、つまり実践理性として働く際には、肉体的自己保存やそれに媒介された社会保存などの衝動、あるいは、まだ見ぬ快や情感的連帯などへの衝動に必ず裏打ちされており、また、行動が単に反射的ではなく、何らかの自発性を伴う際には、つまり意志的な行為として現れる際には、自然的なものに還元されずにそうしたものから一定の隔たりを持つ意識が、強く言えば精神が、分節化されないままの運命主義あるいは理想主義などとして、行為への決断に住み込んでい、ということになる。

意志行為に不可欠のこうした衝動 (Impuls) は、「正しいことをしようとする衝動」(GS VI, S. 282)として、たしかに一種の道徳的(道徳的善悪に関わる)感情ではあるが、その道徳的な善さは保証されていない。「意志の非合理的な契機は、道徳的なもののバリエーションとは反対に、一切の道徳的なものを原理的に可謬性 (Enthbarkeit) へと断罪する。道徳的な確実性 (安全) は存在しない。それを勝手に仮定するとすれば、そのことがすでに非道徳的であろう」(GS VI, S. 281)とアドルノは言う。それは、アドルノにとって、衝動が「すぐに外に打つて出る」という「退行」的性格を持ち (NAS IV-13, S. 326)「たとえそうした衝動が、「不自由に対する憤慨 (Empörung)」(NAS

IV-13, S. 332) である場合でも、そうした不自由の源である「攻撃的暴力の原理に感染して」(GS VI, S. 282) おり、そのことよって、自らが変革しようとした現状を却って存続させる力となるからである。

意志行為におけるこうした衝動の位置づけを踏まえながら、アドルノは、次のように記して、怒りという情動に、衝動一般に当てはまるような意志行為に至る不可欠の契機であるということに尽きない、積極的な意味合いを付与する。「私は、野蛮に對する闘いには、あるいは野蛮を廃棄するためには、憤慨という契機が必要不可欠だと思います。この憤慨という契機に對しては、人間性の形式的概念を出発点とするなら、それ自体が野蛮だという非難がなされるものですが、しかし、私たちが皆、同じシステムに備わる罪責連関に囚われているのですから、誰も野蛮な性質から自由な人はいないでしょう。そして、こうした性質が災厄に至るのを放置せず、野蛮な原理に對抗させることこそが大切なのです」(Erziehung zur Mündigkeit, S. 123)。

つまり、ここで怒り(憤慨)は、「野蛮に對する闘い」「野蛮を廃棄する」ことに必要不可欠だとされつつ、同時に、そうした怒りに發する行為は上記の「可謬性」に曝されていることが見据えられている。そして、アドルノは、こうした厄介さを踏まえた「ありうる高次の実践形態」とはどのようなものなのかを見出すためには「理論的反省が必要である」(GS X, S. 765)とし、そうした理論的反省を實踐の遅延ないしは断念だとして

敵視して衝動に發する即座の直接的行動を主張する「政治的行動主義 (Aktivismus)」に對して、そうした性急こそが「ありうる高次の実践形態」への断念だとして厳しく批判する。怒りの情動を一つの典型とする衝動がアドルノによって意志行為の不可欠の契機だとされることによって、理性主義と決断主義との対立が、解消されるどころかむしろ、實踐への理論的反省と理論敵視の直接的實踐との対立という新たな姿で再び「道徳の現場」として登場する。

アドルノによって提起されたこうした「現場」の問題についての思索に實踐の側から奇与するものとして、ソ・ジュンシクの思索と實踐を取り上げたい。

## 二 ソ・ジュンシクの實踐の形

ソ・ジュンシクは理論家ではない。彼の本領は實踐にある。特別收容所からの或る手紙でソ・ジュンシクは、韓国在住の従妹に對し、「人間というのは、頭でだけ考えるのではなく体でも考えるのだということ、体が或る環境に置かれ、その環境からくる喜びも苦しみも体が味わつてはじめて、頭のほうで考えるのも切実となり本物となるということ、(……) 本当に誠実に人生とこの世界とを考え生きたるためには身を投げ出さねばならないということ、このことを(……) よく肝に銘じてくれるように……」と願い、そして「醜いことに対する嫌悪」と

「不正義に対する猛烈な憤怒」を育むように求めている（『書簡』一八五—一八六頁<sup>4</sup>）。これは、単なる説教ではなく、彼自身の基本的な性向でもあれば、また自分自身に対する指針でもあった。それは、まず、「体で（も）考える」こと、つまり、「環境」と身体的に交流し、そのことから生じる「喜び」や「苦しみ」、「嫌悪」や「憤怒」などの情動において「環境」（と同時に自分をも）経験することが基盤であり、次いで、（必ずしも常に、そうした情動に身を任せて即座に行為に出る、ということではなく）そうした（主客についての）情動的経験の指し示す方向性（例えば「喜び」ならその持続や反復という、また「苦しみ」ならその除去という方向性<sup>5</sup>）に導かれながら「頭のほうで」「切実に」考え、そして更に、その考えが示す方向に「身を投げ出す」、ということであった。

まず、彼自身の情動の実際の姿について、ここでの考察のテーマである怒りに限定して（ただし、〈怒り〉が抑圧も放出も昇華もされない場合に生じる〈憎しみ〉や〈嫌悪〉も含めて）見てみる。

高校卒業後に留學した一九六〇年代後半の韓国の首都ソウルで、路上世活をする孤児や、生活苦のために物売りをしたり「奉公」をしたりする幼い子どもたちや、「若い娼婦たち」の姿を目撃して、彼は、「毎日毎日衝撃を受け、憤り、悲しみに浸りながら（……）呆然として過こした」（『自生』二六七頁）。また、刑務所や特別収容所に拘禁されてからは、思想転向を拒否

する「左翼思想犯」としての彼とその「同志たち」に対する虐待への怒りはもちろん、その「同志たち」の「野卑な行動、汚い言葉……を見聞きしながら怒りを爆発させ、（……）（懲役三〇年）の権威にも〈党幹部出身者〉の権威にも構わず喰ってかか」った（『自生』二三八頁）。彼の怒りは、しかし、こうした彼の外部の「社会的な悪、道徳的な悪などの悪それ自体」や「悪それ自体に伴う（……）（恥知らずさ）や（野卑さ）や（不誠実）」（『書簡』五九—六〇頁）にだけ向けられたわけではなく、「心の底まで潔白な人間では決してない自分の「内部の醜悪さ」を「嫌悪」するというふうには、自分に対しても向けられた（『書簡』六二—八頁）。それは、自分よりも有能で才能があり世間を楽に渡っていく（ように見える）人々に対する僻みであり、自分の欠点には甘く他人の欠点には無慈悲なことであり、釈放の実現が可能となりそうな方向をもった思考に客観的な正当性を感じるという自己欺瞞に誘惑されることなどであった。彼は、そうした自分の「内部の醜悪さ」にも怒りを発した。こうした自分の内部に向かう怒りには、もう一つの種類があった。それは、「悪と不正と卑劣とにたいする憎悪のみならず、悪と不正と卑劣にたいする憎悪に、たいする憎悪までもが、私の顔を歪めさせ、私の声を嘎れさせ（……）、私の心をひねくれさせてしまつ」ており、「憎悪と憤怒の最前線で傷だらけにな」つていくというものだった（『書簡』五八六—五八七頁）。

さて、そうした彼の怒りのうち、彼の外部に対する怒りの大

半については、それが導く思考の方向とその思考の結果として「身を投げ出す」仕方は、決してたやすい道ではなかったが、しかし比較的明らかではあった。あの子どもたちと自分たちに苦痛と悲しみを強いている権力が自分に求める思想転向には屈しないこと、特に、裁判所の判決した刑期が終わってもその思想と生き方のゆえに身柄を拘束し続けることの不当さに抗議する裁判闘争を行って釈放への希望に生きること、がそれだった。そして、後者については「思想・良心の自由」という「人権」思想が、依拠しうる理論として彼の前にあった。

しかし、自分の内部に対する怒りについては、その原因を取り除くために何をどのように考えればよく、どのように「身を投げ出す」ことができるのかは、少しも明らかではなかった。人権思想にも、そして、彼が依拠していたもう一つの「信念体系」であるマルクス主義<sup>(7)</sup>にも、その答えを彼は見出せなかった。「すべての人間が非人間の軛から脱し、隣人とともに人間らしく生きていけることを痛切に願」(「自生」二五二頁)、う彼は、客観的な現状に対する怒りを反復、持続することにより、「願い」の切実さを保ちつつその「願い」の客観性を不断に確かめてきた。それと同時に、そうした「願い」が実現しうるための主体の側での「前提」として「人間の(本性)の可変性」を「信じたい」と考えていた(「昔簡」二七五頁)。彼には、自らの「人間的限界」(「自生」二四八頁<sup>(8)</sup>)に対する敏感さとそれへの怒りが必要だと自覚されていた。しかし、いくら怒りを向けても

自分の「人間的限界」が克服される見通しはなく、むしろその運命性が強く感じられていた。そうしたいつ果てるともしれない内外に対する怒りの副作用として、彼の心は「ひねくれてしま」い「傷だらけ」になり、「死への誘惑に苛まれる日々」が、当局の拷問によって激しい肉体的苦痛を蒙ったとき以上に「しばしば訪れた」(「自生」二二六頁<sup>(9)</sup>)のだった。

そのような時期に彼は、転向工作の一環として許されていたキリスト教とナザレのイエスの生涯に関する読書(一九八一年頃から本格化)を通じて、当局の思想を裏切るほど、自身の「生の経験、闘争の経験に照らしてイエスの生とキリスト教を実に熾烈に思索」(「昔簡」二九一頁<sup>(10)</sup>)した。なぜなら、そこに彼の求めている答えが見出せそうに、彼に思えたからである。その思索の果てに、彼は、人間としてのイエスの生に、「徹底して弱者、被抑圧者、遺棄された者、汚れた者、無知な者……に対する愛(……)から出発し、彼らに対する愛で一貫し、彼らに対する愛のゆえに苦しむ赤裸々な解放者の姿を、自由な、人間を抑圧するすべてのものにラディカルに挑戦し、愛と正義の王国の到来を夢見ながら処刑された、感動的な(終末論的実存)を見た」(「自生」二八九頁<sup>(11)</sup>)。こうしてイエスは、ソ・ジュンシクにとって、自身の生き方の範としうる存在となった。しかし、相変わらず「人間的限界」を抱えたままの彼に、そうした「イエスの生」を可能にした「一貫した愛」が、イエスを「憧憬」しイエスに「傾倒」するだけで可能となるわけではな

かった。彼は、人間イエスにそうした「一貫した愛」を可能にしたのは（神）へのイエスの信仰であると見、その信仰までも含めてイエスを範とするかどうかという問題にここで行き当った。しかし、彼には、回心するという道は「なにか自己欺瞞のように感じられてきた」（『自生』二九二頁）のだった。その理由の一つは、自分が回心に惹かれるのは、そして、そもそもイエスを思索し始めたことすら、釈放されたいという下心のせいではないか、との疑念があったからだ。「自分に対して数限りなく問うてはまた問うた。『本当だろうか？ ひょっとしてお前は、監獄の外に出たくてイエスを思索するのではないか？』」（『獄中書簡 第三版への序文』、二〇〇七年、45-46頁。和訳未刊）。つまり、回心というのは体のいい転向なのではないか、本当は転向工作への秘かな迎合なのにそれを新生だとして自分を欺いているのではないか、との疑念であった。もう一つの理由は、自分という主体の「人間的限界」が克服される可能性の有無を自分の主体で確かめるのではなく、超越的なものへの信仰によってその可能性ありという答えを出すということは、彼には安直で虫のいい解決法に思えたからだ。こうして彼は、彼の内側への怒りをめぐる問題に答えてくれない彼のそれまでの「信念体系」と、「自己欺瞞」にも思える、イエスの信じた神を信じることとの間の、苦しい二者択一を迫られることになった。

こうした苦悶に方向づけられながらソ・ジュンシクが辿り着いた「身を投げ出す」形は、「四〇日間以上の断食闘争」だっ

た。

彼は、思想犯の予防拘禁制度の廃止と自身の釈放を要求項目とし、結果として、目標以上の五一日間の断食を行った。五日目に、彼の裁判闘争に協力していた弁護士の説得を機縁として、自らの意志で断食闘争を終結させた。彼がその「長く苦痛だった闘争」の果てに直接手にした「戦利品は、今私の目の前には何もな」かったが、その一方で彼は「妙な充実感、ドス黒い血をどつと流し出した後のようなみずみずしい爽快感、いやむしろ、奇妙な勝利感のようなもの」を感じていた（『書簡』七二九頁）。そして、「人間の肉体というものは（……）ピンと張りつめた緊張が維持されて、ギョツと引き締まった精神の力に助けられて、凄いことを易々とやり抜くことができるのだ」という、陳腐と言えば陳腐とも言える事実を、私が切実に私の体で実感できた」という「収穫」を得た（『書簡』七三〇頁）。それは、「イエスの生」への傾倒の中にも紛れこんでいたであろうあの当局への迎合という「ドス黒い」下心とその下心の更に底にある安楽や肉体的自己保存への欲求を、文字通り自分の「身を投げ出す」ことよって一旦引き下ろせることができたとということ、自分の「肉体」が、「精神の力に助けられ」て自己保存と格闘しながら、自己保存とは別のものを志向し、「やり抜くことができた」ことによる「充実感」、「爽快感」、「勝利感」だった。そのことは同時に、彼のあの「願い」の実現のための主体の側での前提であった「人間的限界」の克服の

可能性が、たとえごくわずかではあれ、「切実に私の体で実感できた」ことを意味していた。あの「人間の〈本性〉の可変性」(つまり、それが、現にある姿とは別様のものでありうること)は、「信じたい」ものから信じられそうなものへと変わった。つまり、「希望が自生」した(「自生」九頁)のだった。また、こうした主体の側での経験と並んで、彼は、「〈最善〉を尽くしてもこの壁が突き抜けられなかったという事実を私の体でもって自ら、行動によって確認した」(「書簡」七三〇頁)とし、同じ「願い」の実現のための客観的条件として歴史的に可変的であるべき社会という「壁」が、どこまで頑強で手ごわいものかを身を持って経験したと記している。

他方、課題であった「信念体系」の衝突の問題は、きれいに解決されなかった。マルクス主義とキリスト教との関係は、彼にとつて、せいぜい「〈共存〉、よくても〈調和〉」でしかありえないだろうと思われた(「書簡」七五六頁)。しかし、「イエスのおかげで、私は第二のソ・ジュンシクになった」と、彼は特別收容所からの解放一二年後に語っている。それは、彼が、断食闘争を経た今、自己欺瞞への怯えなしに、「イエスの生」を自分の生の範とすることができ、そうして、常識的なマルクス主義から見ても常識的なキリスト教から見ても非正統的な、「イエスに対する憧憬と傾倒」を気質とする「広い意味でのマルクス主義者」としの生き方、どちらの陣営からも仲間として受け入れられたい孤独な生き方を、自分のものとして受け入

れることができた、ということであろう。ソ・ジュンシクは、こうしたプロセスを「生の更新」<sup>(18)</sup>と呼び、「私はいつも生の更新を喜んだ」と記している(「自生」一九頁)。

ところで、怒りについては、断食闘争に表現されたような変形が、その後の彼の生き方の本質的な特徴となったと言える。その変形というのは、彼の内部と外部に向かうどちらの怒りも相変わらず激しいまま、断食という行為の形に現れているように、その攻撃性を自分の意志によって自分の肉体に向ける、いや、より正確に言えば、肉体的自己保存に引きずられ、だから、自分を憎んでいるようでないがらその実そのままの在り方で在りつづけることを、運命観という一緒のイデオロギーによって正当化しつつ欲している自分の心の部分に向ける、というものであった。つまり、そうした自分の心にある「人間的限界」という「壁」に、彼の「肉体」は、怒りからエネルギーを補給された「精神の力に助けられ」て闘いを挑み、その「壁」がどこまで運命的なものなのかを、生身で確かめようとしたのである。彼のそれまでの内面的な自己憎悪は、憎悪の原因ではなくその結果の方に憎しみを向けることによって原因との衝突を避け、原因の温存を図るという、あの心の自己防衛としての怨恨であり、そうした自分の防衛機制に、極限的な断食闘争という形で、彼は怒りの矛先を向けたのだった。彼の肉体がその闘いで求めたものは、「力強く横溢する生」と「美しく健康な」「精神」だった(「メッセージ」一五頁)。彼は、「人間の〈本性〉の可変

性」について、自然主義的な運命観によって、根深い不満のうちには諦念するのでもなく、とにかく信じたいという願望的思考に留まるのでもなく、また、一種の実践的要請として理念化するのでも、超越的な存在への信仰によって希望を確保するのでもなく、「生」から湧き上がろうとする怒りの「力」に身を委ねることによってその有無を確かめようとしたのであり、たとえその確認作業の成果はごく僅かであったとはいえ、そうした試みを為しえたことそのことにおいて自分の「精神」の「健康」さを一時的ではあれ發揮することができた。彼の不健全で自虐的とも見える断食は、自己処罰という代償行為ではない。少なくとも、それに尽きるものではない。

こうしたソ・ジュンシクの実践の形は、アドルノによる「政治的行動主義」への批判のポイントである「自己省察の欠如」(GSX.S.763) ないしは「内観(自分の内部を見つめること)に対する防衛」(GSX.S.764)、あるいは「集团的パラノイアでもって私的パラノイアに始末をつける」(GSX.S.767) という在りは、明確に免れている。そして、ソ・ジュンシクの実践の形は、アドルノが「野蠻を排するために不可欠」だとする「怒り」の契機を抑圧することなく、少なくとも主体面については「希望が自生」するという一定の理論的寄与を果たしうる。だとすれば、彼の実践の形は、もちろん、安全確実な道徳性を持つものではなく、「理論的反省」からの批評・批判を受ける余地があるにせよ、「ありうる高次の実践」を追究する一種の理論的模

索の姿ともなっているとと言えるだろう。

### おわりに

人間が生きつづける心の力の源は、何よりも快であり、そして、自分が快を必要としていることが少なくとも親密な人々によって配慮されることだろう。怒りには、そうした不在の配慮を求める率直な訴えと配慮が不在であることへの正当な抗議とが含まれている。それは、生き易い外界を産み出したいという未規定の衝動、生き難い外界を生き易く変形したいという衝動、外界のそうした生き易さ、生き難さについての一種の判断としての情動だと言える。

しかし、そうした配慮の制限によって善かれ悪しかれ現に成り立っている家族や社会の中で、怒りはいつか屈折し、抑圧されたり、巧みに水路づけられたりしていく。そうした仕方では社会に統合される人間は、たいていの場合、怨恨を心の底深くに抑え込むか、社会的に認知された昇華の様々な形を習得して、生き延びていく。その過程で、屈折した怒りが、まるで運命のような姿をとるようになる。

怒りのそうした現状、この「道徳の現場」の一つにおいて、アドルノは、粘り強い感受的な観察を通して、「まだ始まっていない進歩の蜚気楼」(GSX.S.626) がそこに浮かび上がりうることを、また、ソ・ジュンシクは、長い苦悩の果てに怒りの

情動に導かれて生身の実践へと身を投げ出すことによつて、「人間の〈本性〉の可変性」は単なる願望ではなく希望でもありうることを、見出した。しかし、快を求めて湧き上がる怒りは、自分の求めている快がどのようなものであるのかをまだ知らない。「欲動がもはや破壊的に表出されなくてもよいので抑圧も道徳ももはや必要でなくなっているだろうような、そんな自由の状態の地平線は、黒く覆われている」(GS VI, S. 88)。怒りの中に現れる健やかさを求める肉体の願いを宿した精神は、そうした閉塞の中で、概念的な労苦や自虐に見紛う実践によつて、断念に抗う拠点をようやく手にすることができると。

## 注

(1) アドルノからの引用の典拠表示は、「全著作集」の場合には、GSと略記し、その後に巻数(ローマ数字)、頁数(S)の後にアラビア数字)を、「遺稿集」の場合には、GSと略記し、その後に部数と巻数(ローマ数字・アラビア数字)、頁数(S)の後にアラビア数字)を記す。和訳書の対応頁は記さないが、多くの方々の訳業に負うところが多い。ちなみに、「全著作集」から引用した書名、作品名は、GS VI: *Negative Dialektik* GS X: *Fortschritt, Marginalien zu Theorie und Praxis* であり、「遺稿集」から引用したのはその第四部である講義録からであり、その書名は、NAS IV-13: *Zur Lehre von der Geschichte und von der Freiheit* である。

(2) 本論考の原型である関西倫理学会二〇二二年度大会での口頭発表では、アドルノについて、その「2 意志行為と衝動」、「3 怒りの変容。理論と実践」において言及したが、ここでは紙数の関係でその要点のみを以下の「二」において記す。

(3) 서준식. 一九四八年、在日朝鮮人二世として京都に生まれ、高校卒業後、両親の出生地韓国に留学(ソウル大学法学部)。大学在学中の一九七一年、造作された「学園浸透スパイ団事件」で韓国公安当局に逮捕され、懲役七年の判決を受けて服役。「思想転向」を拒否し続けたため、刑期満了後も釈放されず、予防拘禁制度により更に一〇年間、特別収容所に収容された。この間、収容所内から、「思想・良心の自由」に反する予防拘禁制度の不当性を訴えて裁判闘争を続け、また、一九八七年には五一日間に及ぶ断食闘争を行った。一九八八年、釈放され、韓国内で様々な人権運動を展開し、更に二度の逮捕・拘束を経験。二〇〇五年、ドイツに移住し、現在に至る。著書として、「나의 주장」反사회안전법 투쟁기록(私の主張——反社会安全法闘争記録) (1989, 裁判闘争の記録)、「옥중서한(獄中書簡)」(1989, 2002, 2008)、「서준식의 생각」(ソ・ジュンシクの思考) (2003, 人権運動文集) (上記いずれも韓国で発行)がある。

(4) ソ・ジュンシクからの引用の典拠表示は、和訳のあるものはすべて和訳書の書名(略記)と頁数を記す。書名は以下のように略記する。「徐俊植 出獄メッセージ」(一九八八年、徐君兄弟を救う会編訳) = 「メッセージ」; 「徐俊植 獄中

- 書簡(一九九二年、拙訳) = 「書簡」、[「自生への情熱——韓国政治囚から人権運動家へ」(一九九五年、拙編訳) = 「自生」、[「韓国人権運動の証言」(二〇〇一年、小西裕美と筆者との共編訳) = 「証言」。
- (5) 「苦しみは言う、「去れ!」と。」(GS VI, S. 203. アドルンによるニーチェ「ツアラッストラ」[陶酔の歌]からの引用)を参照。
- (6) 彼の〈悲しみ〉については、以前、少し立ち入って考察したことがある。「政治囚の獄中書簡に見る韓国社会と倫理」、「文化を読み解く——文学作品に見る東洋と西洋——」(長野県短期大学二〇〇五年市民カレッジ報告書)二〇〇六、一—二一九頁。
- (7) 彼は自分のことを、「広い意味での」マルクス主義者だと位置づけている(「自生」二八三頁)。
- (8) 「信仰は〈不可能〉の意識から出発するといえます。私は久しい以前から私の限界に衝きあたつてもがいています。暴力(合法、非合法の)にたいする恐れ、知的限界の自覚、嫉妬心、執拗な人間観察による人間嫌悪の悪い癖、人間たちのなかで人間たちとともに生きていく能力の決定的な欠乏、獣のようなさまざまな暗い欲望……こうした人間的限界の前で、私は(ほとんど)ありそうにはありませんが(「神様」を求められるかもしれません)。「自生」二四八頁)。
- (9) ソ・ジュンシクは、刑務所に拘禁されていたとき、転向を強要する厳しい拷問を受けた際、そのあまりの厳しさに耐え抜けそうにないと感じたとき、自殺を図つたことがある。それは未遂となつたが、特別収容所時代のこの「死への誘惑」は、したがって、決して単なる比喩ではなかつた。
- (10) 「私はその頃の一時期を、飯を食べながらも便所で用を足しながらも(私の生の経験の脈絡で)イエスを思索し、イエスに胸が痺れるような共感を感じながら、イエスとともに日々を過(した)」「(「自生」二九〇頁)。
- (11) そして、「私の気質のなかに元来イエスに対する憧憬と傾倒が潜在していたこと実感」(「自生」二九一頁)したとも記している。
- (12) 断食闘争三カ月後の手紙でソ・ジュンシクは次のように記している。「私は結局いつかは〈降伏〉しなければならぬのでしようか。しかし、〈降伏〉するとしても、実際に両手をぐつと上げて降参するその瞬間までは、私は、精いっぱい率直でありたいし、正直でありたいし、疾しくなくありたいし、力を尽くして最後まで闘いたいのです。そして、そうした身の処し方だけが、堂々と〈降伏〉できるほとんど唯一の道であると、信じてやみません。」(「書簡」七五一頁)これは、彼が断食闘争に「身を投げ出」した時の心境でもあつただろう。中学時代に器械体操選手だつた彼には、アスリートの性格がたしかにある。
- (13) この「四〇日間以上の断食闘争」は、イエスが宣教開始前に荒野で行つたという四〇日の断食(「マタイ福音書」四、一以下)を連想させる。
- (14) たしかに、この断食闘争によって、直ちに「戦利品」は得られなかつたが、しかし、それから約一年後に、韓国社会で

の民主化闘争の高揚とともに、ソ・ジュンシクは「非転向」を貫いたまま予防拘禁を解かれて収容所外に出ることができたし、また、釈放後の彼の精力的な活動によって、更に一年後には、思想犯の予防拘禁を定めた法の廃止と何十年間も拘束されていた「左翼囚」たちの釈放という成果を得た。つまり、この断食闘争の目標を、彼はその二年後に達成したのであった。

(15) 断食闘争終結後四カ月経った時に書かれた実妹宛の手紙には、「私は、私の人間的限界の前で絶望」し、「いったい、どれほどの歳月をさらに揺れ、悲しく思い、そして飢え渴けば、私は美しくなれるのだろうか」と記されている(『書簡』七八頁)。

(16) 隔月刊誌『아우사이다』01(アウトサイダー 第一号)二〇〇四年四月、ソウル、一六四頁。『証言』三二六五頁参照。

(17) 彼は自分のことを「性質の異なる二つの文化に所属するが、そのどちらにも完全に同化していない」「境界人」だとし、マルクス主義者としては、「いまだにプロレタリアとの距離が遠いだけでなく、ふたたびブルジョワに戻れないこともまた明らか」であること、民族主義者としては、「失ったものは〈在日同胞〉への所属感だけで、その代価として受けて当然なはずの(本国)生え抜き」の資格はいまだに拒否されていること、などを挙げている(『自生』一九八頁以下)が、在日朝鮮人という彼の出自そのものにおいてすでにそうした「境界人」性を、アドルノふうによれば(非同一性)を、彼は抱え込んでいた。民族主義やマルクス主義への道はその

「慢性的な孤独」(同上)から逃れて(同一性)を目指す試みであったが、この「信念体系」の選択という問題の場合も、彼はやはり「境界人」となった。客観的状況に対する情動的経験と自己の内面に対する仮借ない省察とに忠実であり続ける限り、孤独で苦しい「境界人」でありつづけるはかなかったのだと言える。

(18) ソ・ジュンシクの言う「生の更新」は、アドルノが哲学に求める「自分の試金石で自分を磨くことによる不断の自己更新」(GS VI, S. 44)と呼応している。

(19) 出獄後、一種の保護観察の下にあった彼は、再拘束を覚悟の上で——実際にも二度拘束されたのだが——「体制内」的でない人権運動を行い、その際の基本姿勢を、「苦痛に満ちた世界で、まるで苦痛が存在しないかのような虚構の中へ引きずりこもうとする手を振り払い、『自ら苦痛となること』によってこの世界とこの世界における生を証言する勇氣」だと、ある時事週刊誌の連載コラムに書いた。『証言』四八頁以下。

(にしむら まこと・長野県短期大学)